

ホッジ構造に関する書き留め

2026年4月26日12時54分更新

本稿は、[1]を参考にして、ケーラー多様体上のホッジ構造を、なるべく最短で理解する試みを書き留めたものです。多様体に関する知識は[2]に基づきます。

目次

1	線形代数に関する準備	1
1.1	複素平面の接空間の場合	4

約束

1. 整数すべてがなす環を \mathbf{Z} 、実数体を \mathbf{R} 、複素数体を \mathbf{C} で表し、自然な埋め込みによって $\mathbf{Z} \subset \mathbf{R} \subset \mathbf{C}$ となっていると考える。
2. \mathbf{C} 内の虚数単位を一つ固定し、 i で表すことにする。
3. 複素数 z の実部を $\Re z$ 、虚部を $\Im z$ で表す。



1 線形代数に関する準備

V を有限次元 \mathbf{R} 線形空間とし、 $V_{\mathbf{C}} := V \otimes_{\mathbf{R}} \mathbf{C}$ 、 $W := \text{hom}_{\mathbf{R}}(V, \mathbf{R})$ 、 $W_{\mathbf{C}} := \text{hom}_{\mathbf{R}}(V, \mathbf{C})$ と置く。慣習に習って、 $V_{\mathbf{C}}$ の元 $u \otimes 1 + v \otimes i$ を $u + iv$ と書くことにする。

命題 1.1 $W_{\mathbf{C}}$ に対して以下の二つの線形同型がある。

- (1) $W_{\mathbf{C}}$ の元 f は、 W の元 g, h を用いて

$$f = g + ih = (u \mapsto g(u) + ih(u))$$

と一意的に表される。したがって線形同型 $W_{\mathbf{C}} \simeq W \otimes_{\mathbf{R}} \mathbf{C}$; $f \mapsto g \otimes 1 + h \otimes i$ がある。

- (2) $W_{\mathbf{C}}$ の元 f に対して、

$$\tilde{f}(u \otimes z) := zf(u)$$

と拡張して、 $\text{hom}_{\mathbf{C}}(V_{\mathbf{C}}, \mathbf{C})$ の元 \tilde{f} を与えられる。さらに写像 $W_{\mathbf{C}} \rightarrow \text{hom}_{\mathbf{C}}(V_{\mathbf{C}}, \mathbf{C}); f \mapsto \tilde{f}$ は線形同型で、逆写像は $f \mapsto f|_V = (u \mapsto f(u \otimes 1))$ で与えられる。

証明 (1)について。元 $f \in W_{\mathbf{C}}$ に対して、 $g := \Re f$, $h := \Im f$ とすれば目的の表示 $f = g + ih$ を得られる。詳細は省略する。

(2)について。はじめに \tilde{f} が well-defined であることをみる。写像 $F: V \times \mathbf{C}; (u, z) \mapsto zf(u)$ は \mathbf{R} 双線形写像であるから、 \mathbf{R} 線形写像 $\tilde{f}: V_{\mathbf{C}} \rightarrow \mathbf{C}$ が誘導され、ベクトル $u \in V$, 複素数 $z, z' \in \mathbf{C}$ に対して $\tilde{f}(z'(u \otimes z)) = \tilde{f}(u \otimes (z'z)) = z'zf(u) = z'\tilde{f}(u \otimes z)$ と計算できるので、 \tilde{f} は \mathbf{C} 線形写像でもある、すなわち $\tilde{f} \in \text{hom}_{\mathbf{C}}(V_{\mathbf{C}}, \mathbf{C})$ である。写像 $f \mapsto \tilde{f}$ が \mathbf{C} 線形写像であることに注意する。逆の写像を与えよう。元 $f \in \text{hom}_{\mathbf{C}}(V_{\mathbf{C}}, \mathbf{C})$ に対して、制限 $f|_V: V \rightarrow \mathbf{C}; u \mapsto f(u \otimes 1)$ を考えると、 $f|_V \in W_{\mathbf{C}}$ である。構成から、元 $f \in W_{\mathbf{C}}$ に対して $(\tilde{f})|_V = f$ となることをみるのは易しい。逆の合成を考えるため、元 $f \in \text{hom}_{\mathbf{C}}(V_{\mathbf{C}}, \mathbf{C})$ を取ると、勝手なベクトル $u \in V$ と複素数 $z \in \mathbf{C}$ に対して

$$\begin{aligned} (f|_V)^{\sim}(u \otimes z) &= z(f|_V)(u) && \because \text{拡張の定義} \\ &= zf(u \otimes 1) && \because \text{制限の定義} \\ &= f(u \otimes z) && \because \mathbf{C} \text{ 線形性} \end{aligned}$$

と計算でき、 $(f|_V)^{\sim} = f$ であることもわかった。ゆえに写像 $f \mapsto \tilde{f}$ は \mathbf{C} 線形同型である。

証明終

注意 1.2 双対空間を $*$ を付けて表すならば、この命題は、標準的な \mathbf{C} 線形同型 $V^* \otimes_{\mathbf{R}} \mathbf{C} \cong (V \otimes_{\mathbf{R}} \mathbf{C})^*$ があることを示している。

この節の冒頭で述べた通り、以降では、 $V_{\mathbf{C}}$ の元 $u \otimes 1 + v \otimes i$ を $u + iv$ と書くことにする。

定義 1.3 $I^2 = -\text{id}_V$ を満足する \mathbf{R} 線形写像 $I: V \rightarrow V$ を V の複素構造と呼ぶ。

観察 1.4 $I: V \rightarrow V$ を V の複素構造とする。

- (1) 複素数 $a + bi$ に対して、 $(a + bi)u := au + bIu$ と定めることで、 V に \mathbf{C} 線形空間の構造が入る。
- (2) V の基底を取って、 I を $\dim_{\mathbf{R}} V$ 次正方形行列とみると、 $\det(I)^2 = (-1)^{\dim_{\mathbf{R}} V}$ となるので、 $\dim_{\mathbf{R}} V$ は偶数でなければならない。
- (3) 偶数次元 \mathbf{R} 線形空間 V には、少なくとも一つの複素構造が定まる。なんとなれば、基底 $e_1, e'_1, \dots, e_n, e'_n$ を取って、行列 $\begin{pmatrix} 0 & -1 \\ 1 & 0 \end{pmatrix}^{\oplus n}$ で表現される線形写像 I を誘導すると、この I が V の複素構造だからである。
- (4) V が \mathbf{C} 線型空間であるとき、 $Iu := iu$ とすることで、 V の概複素構造 I を得られる。
- (5) 不定元 t に関する多項式 $t^2 + 1 = (t - i)(t + i)$ が I の最小多項式であるから、 $\{i, -i\}$ が I の固有値のすべてであり、 i の固有空間を $V^{1,0}$, $-i$ の固有空間を $V^{0,1}$ で表すとき、

分解

$$(1.1) \quad V_{\mathbf{C}} = V^{1,0} \oplus V^{0,1}$$

が得られる。具体的に表せば

$$V^{1,0} = \{u - iIu : u \in V\}, \quad V^{0,1} = \{u + iIu : u \in V\}$$

と書ける。

命題 1.5 分解 (1.1) に対して双対を取って分解

$$(1.2) \quad \text{hom}_{\mathbf{C}}(V_{\mathbf{C}}, \mathbf{C}) \cong \text{hom}_{\mathbf{C}}(V^{1,0}, \mathbf{C}) \oplus \text{hom}_{\mathbf{C}}(V^{0,1}, \mathbf{C})$$

を考える。さらに命題 1.1 を用いることで $W_{\mathbf{C}}$ を分解し、 $\text{hom}_{\mathbf{C}}(V^{1,0}, \mathbf{C})$ に対応する $W_{\mathbf{C}}$ の部分空間を $W^{1,0}$ 、 $\text{hom}_{\mathbf{C}}(V^{0,1}, \mathbf{C})$ に対応する $W_{\mathbf{C}}$ の部分空間を $W^{0,1}$ で表すことにする。このとき $W^{1,0}$ の元は \mathbf{C} 線形写像で、 $W^{0,1}$ の元は反線形写像である。

証明 $W^{1,0}$ について考える。元 $f \in W^{1,0}$ を取り、 $\text{hom}_{\mathbf{C}}(V_{\mathbf{C}}, \mathbf{C})$ の元と考えるとき、勝手なベクトル $u \in V$ に対して

$$\begin{aligned} f(u) &= f\left(\frac{1}{2}u + \frac{1}{2}u\right) \\ &= f\left(\frac{1}{2}(u - iIu) + \frac{1}{2}(u + iIu)\right) && \because (1/2)iIu \text{ を挟み込んだ} \\ &= f\left(\frac{1}{2}(u - iIu)\right) && \because \text{分解 (1.2) より} \\ &= \frac{1}{2}f(u) - \frac{i}{2}f(Iu) \end{aligned}$$

と計算でき、 $f(u) = -if(Iu)$ が勝手なベクトル $u \in V$ に対して成立する。特に勝手なベクトル $v \in V$ に対して、 $u = Iv$ と考えることで、 $f(Iv) = if(v)$ となる。標準な線形同型から、 $W_{\mathbf{C}}$ の元としてもこの等式は成立する、すなわち f は \mathbf{C} 線形写像である。

$W^{0,1}$ についても、元 $f \in W^{0,1}$ を取り、 $\text{hom}_{\mathbf{C}}(V_{\mathbf{C}}, \mathbf{C})$ の元と考えれば、勝手なベクトル $u \in V$ に対して $f(u) = if(Iu)$ が成立し、従って勝手なベクトル $v \in V$ に対して $f(Iv) = -if(v)$ が成立し、反線形写像であることが確かめられる。 証明終

定義 1.6 分解

$$W_{\mathbf{C}} = W^{1,0} \oplus W^{0,1}$$

のうち、 $W^{1,0}$ を \mathbf{C} 線形部分、 $W^{0,1}$ を反線形部分と呼ぶ。

1.1 複素平面の接空間の場合

前節で展開した線形空間の複素構造の議論を \mathbf{C} の接空間に対して当てはめてみる。ユークリッド位相の意味での開集合 $U \subset \mathbf{C}$ を考える。複素数の表示 $z = x + iy$ を以て、2次元実多様体としての U の座標を取る。したがって点 $u \in U$ に対して、 u における接空間 $T_{U,u}$ は

$$\left(\frac{\partial}{\partial x}\right)_u, \quad \left(\frac{\partial}{\partial y}\right)_u$$

を基底として持つ2次元実線形空間である。観察 1.4 (3) のようにして、

$$I \frac{\partial}{\partial x} = \frac{\partial}{\partial y}, \quad I \frac{\partial}{\partial y} = -\frac{\partial}{\partial x}$$

として複素構造 $I: T_{U,u} \rightarrow T_{U,u}$ を定めておく。

定義 1.7 点 $u \in U$ とに対して、余接ベクトル

$$(dz)_u := (dx)_u + i(dy)_u, \quad (d\bar{z})_u := (dx)_u - i(dy)_u$$

を与えて、複素数値1形式 $dz, d\bar{z} \in \Omega_{U,\mathbf{C}} := \text{hom}_{\mathbf{R}}(T_U, \mathbf{C}) \cong \Omega_{U,\mathbf{R}} \otimes_{\mathbf{R}} \mathbf{C}$ を定める。ここで、 $\text{hom}_{\mathbf{R}}(T_U, \mathbf{C})$ は各ファイバーに制限すると \mathbf{R} 線形写像 $T_{U,u} \rightarrow \mathbf{C}$ を誘導する滑らかな写像 $T_U \rightarrow \mathbf{C}$ の集合を表し、 $\Omega_{U,\mathbf{R}}$ は T_U^* の滑らかな切断がなす \mathbf{R} 線形空間を表す。

観察 1.8 (1) U 上の切断として

$$(1.3) \quad dx = \frac{1}{2}(dz + d\bar{z}), \quad dy = -\frac{i}{2}(dz - d\bar{z})$$

と表せるので、 $(dz)_u, (d\bar{z})_u$ は $(\Omega_{U,\mathbf{C}})_u$ の \mathbf{C} 上の基底をなす。

(2) dz は I による複素構造の下 \mathbf{C} 線形、かつ $d\bar{z}$ は反線形である。なんとなれば、基底ベクトルに対して

$$\begin{aligned} dz\left(i\frac{\partial}{\partial x}\right) &= dz\left(\frac{\partial}{\partial y}\right) = i = idz\left(\frac{\partial}{\partial x}\right) \\ dz\left(i\frac{\partial}{\partial y}\right) &= dz\left(-\frac{\partial}{\partial x}\right) = -1 = idz\left(\frac{\partial}{\partial y}\right) \\ d\bar{z}\left(i\frac{\partial}{\partial x}\right) &= d\bar{z}\left(\frac{\partial}{\partial y}\right) = -i = (-i)dz\left(\frac{\partial}{\partial x}\right) \\ d\bar{z}\left(i\frac{\partial}{\partial y}\right) &= d\bar{z}\left(-\frac{\partial}{\partial x}\right) = -1 = (-i)dz\left(\frac{\partial}{\partial y}\right) \end{aligned}$$

と計算できるからである。ゆえに $(\Omega_{U,\mathbf{C}})_u$ の \mathbf{C} 線形部分を $\Omega_{U,u}^{1,0}$ 、反線形部分を $\Omega_{U,u}^{0,1}$ で表すことにすると、 dz が $\Omega_{U,u}^{1,0}$ の基底をなし、 $d\bar{z}$ が $\Omega_{U,u}^{0,1}$ の基底をなす。

滑らかな複素数値関数 $f = g + ih: U \rightarrow \mathbf{C}$ を考える。 $\Omega_{U, \mathbf{R}}^0$ を U 上の滑らかな実数値関数とすると、 f を $\Omega_{U, \mathbf{R}}^0 \otimes_{\mathbf{R}} \mathbf{C}$ の元 $g \otimes 1 + h \otimes i$ とみなせる。外微分 $d: \Omega_{U, \mathbf{R}}^0 \rightarrow \Omega_{U, \mathbf{R}}$ を \mathbf{C} に係数したものをを用いると、

$$\begin{aligned} df &= \left(\frac{\partial g}{\partial x} dx + \frac{\partial g}{\partial y} dy \right) + i \left(\frac{\partial h}{\partial x} dx + \frac{\partial h}{\partial y} dy \right) \\ &= \left(\frac{\partial g}{\partial x} dx + i \frac{\partial h}{\partial x} dx \right) + \left(\frac{\partial g}{\partial y} dy + i \frac{\partial h}{\partial y} dy \right) \end{aligned}$$

となる。さらに

$$\frac{\partial f}{\partial x} := \frac{\partial g}{\partial x} dx + i \frac{\partial h}{\partial x}, \quad \frac{\partial f}{\partial y} := \frac{\partial g}{\partial y} dy + i \frac{\partial h}{\partial y}$$

と置けば、

$$df = \frac{\partial f}{\partial x} dx + \frac{\partial f}{\partial y} dy$$

とも書ける。さらに (1.3) を用いれば、

$$(1.4) \quad df = \frac{1}{2} \left(\frac{\partial f}{\partial x} - i \frac{\partial f}{\partial y} \right) dz + \frac{1}{2} \left(\frac{\partial f}{\partial x} + i \frac{\partial f}{\partial y} \right) d\bar{z}$$

と表せる。各点 $u \in U$ で $(dz)_u, (d\bar{z})_u$ が $(\Omega_{U, \mathbf{C}})_u$ の基底であるから、 df の係数に現れる関数は一意に定まる。

定義 1.9 滑らかな複素数値関数 $f: U \rightarrow \mathbf{C}$ を考える。

$$\frac{\partial f}{\partial z} := \frac{1}{2} \left(\frac{\partial f}{\partial x} - i \frac{\partial f}{\partial y} \right), \quad \frac{\partial f}{\partial \bar{z}} := \frac{1}{2} \left(\frac{\partial f}{\partial x} + i \frac{\partial f}{\partial y} \right)$$

と定める。よって (1.4) は

$$df = \frac{\partial f}{\partial z} dz + \frac{\partial f}{\partial \bar{z}} d\bar{z}$$

と表せる。

命題 1.10 滑らかな複素数値関数 $f: U \rightarrow \mathbf{C}$ が点 $u \in U$ において正則であるための必要十分条件は、 $(df)_u$ が \mathbf{C} 線形写像であることである。

証明 $f = g + ih$, $g, h \in \Omega_{U, \mathbf{R}}^0$ と表して、 \bar{z} による偏微分を計算すると

$$\begin{aligned} 2 \frac{\partial f}{\partial \bar{z}}(u) &= \left(\frac{\partial g}{\partial x}(u) + i \frac{\partial h}{\partial x}(u) \right) + i \left(\frac{\partial g}{\partial y}(u) + i \frac{\partial h}{\partial y}(u) \right) \\ &= \left(\frac{\partial g}{\partial x}(u) - \frac{\partial h}{\partial y}(u) \right) + i \left(\frac{\partial h}{\partial x}(u) + \frac{\partial g}{\partial y}(u) \right) \end{aligned}$$

となる。 f が点 $u \in U$ において正則であるならば、コーシー・リーマンの方程式より

$$\frac{\partial g}{\partial x}(u) = \frac{\partial h}{\partial y}(u), \quad \frac{\partial g}{\partial y}(u) = -\frac{\partial h}{\partial x}(u)$$

が成立するので、先の計算から $(df)_u = (\partial f/\partial z) dz$ となり、これは \mathbf{C} 線形写像である。逆に $(df)_u$ が \mathbf{C} 線型写像であるとき、 $(\partial f/\partial \bar{z}) d\bar{z}$ も \mathbf{C} 線形写像であるが、これは反線形写像でもあるので、

$$i \frac{\partial f}{\partial \bar{z}}(u) = i \frac{\partial f}{\partial \bar{z}}(u) d\bar{z} \left(\left(\frac{\partial}{\partial x} \right)_u \right) = \frac{\partial f}{\partial \bar{z}}(u) d\bar{z} \left(i \left(\frac{\partial}{\partial x} \right)_u \right) = -i \frac{\partial f}{\partial \bar{z}}(u)$$

となり、 $(\partial f/\partial \bar{z})(u) = 0$ であることがわかる。ゆえに g, h がコーシー・リーマンの方程式を満足し、 f が u において正則であることが示された。 証明終



文献

- [1] Voison, C. (2002). *Hodge Theory and Complex Algebraic Geometry, I* (L. Schneps, Trans.). Cambridge University Press.
- [2] 松本幸夫 (1988). 多様体の基礎. 東京大学出版会.